依然事件以前

尾代余音

仄かに漂う生活の悪臭を嗅いでようやく、藤内(ふじうち)は目の前に凪紗(なぎさ)がいることに気付いた。夜闇に薄ぼんやりと立ち竦む彼女は俯き加減に、上目遣いで藤内を睨めつけている。過剰な悪意が込められているわけではなく、自身を押さえつける重量のせいだろう。彼女は抱っこ紐で赤ん坊を抱え、背中には大きなリュックサックを負ぶっている。それらの重みで背筋がひどく湾曲してるだけだ。平凡な茶髪の根元で黒が目立ち始めたつむじ。灰色の部屋着は起き抜けにコンビニへ立ち寄るような風体だが、場違いな軍手が目立つ。

藤内は露骨に窪んだ右肩を興味深く観察しつつ、もたれかかっていた白い軽自動車から身を起こす。それから思い出したように両耳のワイヤレスイヤホンを、不器用な手つきで外した。周囲に音はなく、代わりに冷気が鼓膜を直接撫でたような気がした。古めかしい木製アパートに備え付けられた砂利の駐車場は、夕方に通り過ぎた驟雨のせいで花冷えの底にあった。

大仰な仕草でトランクを開けた藤内に、ようやく凪紗は口を開く――手伝ってって言ってたのに。庫内には既にボストンバッグが四つ詰め込まれている。乾ききった布地。凪紗はそれらを乱暴によけて、自らの荷物を力業で押し込みながら藤内の察しが悪い性分を責め立てる言葉を滑らかに並べていく。藤内はリアゲートを支える手の小指でトランク内を指し、既に自分が彼女より多くの荷物を積んだ実績を誇示して反駁を試みるが、その態度自体の傲慢さを摘示されて為す術を失った。融通が利かないよね、妊娠してから特に酷くなった、私に関心がなくなったみたいでさ――次第に日常の生活態度へ敷衍していく凪紗の非難を聞き流しながら藤内は、前屈みになった彼女の胸にぶら下がっている赤ん坊を見遣った。未だ髪の生え揃っていない赤ん坊は、街灯の輝きなど一切気にかけず深い眠りに沈殿している。微かな寝息を聴き拾って眉を顰めながら手癖でスマホを見た。午後九時五十分。

運転するの久しぶりだな――ハンドルを掴んで離すのを繰り返しながら、藤内は明るい調子で口にする。口論を帳消しにする意図を含んでいたが、後部座席のチャイルドシートに赤ん坊を収めている最中だった凪紗は真剣に受け取ってしまったらしく、助手席に腰を下ろしてから不安げに質問を連ねだした。彼女は頻りに、峰屋(みねや)に運転を代わってもらうよう提案する。確かに最近、この車の運転は専ら彼の役目だった（凪紗も免許を持っている

が、運転を担うことはほとんどない）が、今日に限っては無理な相談だ。二、三度無視してなお声高にせがんでくる彼女をたまらず遮った。そして、ここで彼と合流するのではなく道中で拾うよう予定が変更になったことを強い口調で伝達する。昨日グループラインで決めたんだから知ってるでしょ、既読付いてたし――悪意たっぷりに言い含めると彼女はようやく口を閉じた。しかし藤内が深く息を吐き、アクセルペダルを踏み込んだ途端に再び、今度は峰屋との集合場所を訊ねられ思わず小さい舌打ちが飛び出す。

今宵はいつにも増して、何もかも噛み合わない。そういうとき、彼女の幼気な高い声が弥増して耳障りに感じられる。

同じような思いをしていたらしい凪紗が不意にガソリンランプを指差し、場違いに浮かれたテンションでガソリンの残量を気にし始める。さっきの藤内の言動と似た意図らしかった。他人の再演でようやく、余計に怒りを掻き立てる行為であることに気付く。片道ぐらいなら大丈夫だよ――ぶっきらぼうに返すと彼女は――それじゃあ駄目じゃん――と言ってからやや間を置いて潜んだ声で続けた――心中しに行くんじゃないんだから。心中しに行くんじゃないんだから……。彼女なりに冗談めかしたつもりらしかったが、咀嚼してみても、わざとらしく口角を吊り上げることしかできなかった。

すっかり寝静まった路地を駆け、車は国道に出た。途端に歓楽のネオンライトに照射される。運送トラックの派手なエンジン音に囲まれて、二人は長らく沈黙していた。途中で見かけたガソリンスタンドも通り過ぎてしまった。時折訪れる静寂で赤ん坊の呼吸が聞こえるたび、凪紗は大仰に振り返る。藤内もバックミラーで確認するが、闇に呑まれており、座席の輪郭しかわからない。

何度目かの赤信号に引っかかったとき、藤内はカーオーディオに手を伸ばした。中古車についてきた年代物のそれは操作に手間取らされるうえ、ひどく時間がかかる。やっとの思いでラジオを再生させる。男のアナウンサーが抑揚のない声で番組の主旨を紹介している――今夜は昭和の名曲特集です――凪紗が声真似をして繰り返す――昭和の名曲特集です、名曲特集です……。それから、流れ出した演歌らしきイントロに、クソ、と吐き捨てた。

凪紗には自分が生まれていなかった時代の産物に対して妙な嫌悪を覚える癖がある。反抗期のようなもので特別な理由やきっかけなど何もなかったはずだが、やがて老害だの親ガチャだの、それらしい単語を混ぜて通り一遍の理屈を捏ねあげるようになった。以前は勢い任せの悪態に過ぎなかったが、最近では本気で並々ならぬ敵愾心を抱いているように、

藤内には思える。

平成生まれの彼女は自分が好きな（大抵は令和生まれの）コンテンツを持ち上げるとき、必ずセットで過去の何かしらを貶める。藤内も彼女と同じく平成生まれだが、昭和の名曲はおろか、令和の名曲さえ心得ていない。卑俗な悪罵についても、矛先が自分に向くわけでもなかったから一種の常套句として放置するばかりだった。徐々に尖鋭化していく凪紗の態度を咎めるつもりもなければ、それで彼女への評価を上下させるわけでもなかった。今となってはどうでもよかった。

ねえ、鬱陶しいから切ってよ――曲がフェードアウトしていく最中に飛んできた指示に返答しようとしたとき、代わりに響きを増すサイレン音に気付いた。バックミラーに赤い光暈。同時に追いかけてくるマイクの音声はくぐもっていて、アナウンサーに比べれば歯切れも悪い。

救急車はすぐに藤内たちを追い越し、次第に低まるサイレンを残しながら遠ざかっていく。何か、あったのかな――凪紗が震え気味にそう言ったのとほとんど重ねるように藤内は言い聞かせる――救急車なんてよく走ってるよ、何の関係もない。

今日初めて、二人の心情が溶け合っていると藤内は思う。凪紗は歯の根を合わせられずに下顎を震わせている。更に何かを口走ろうとしたとき、背後の赤ん坊が泣き声の端緒を吐いた。それはすぐに頂点に達する。

――車、止めて――どうして――泣いてるから、わかるでしょ……。

ちょうど目に入ったドラッグストアに車を滑り込ませる。凪紗は後部座席に移動して赤ん坊をあやし始めた。藤内には心得がないが、たぶんその所作は堂に入った、如何にも母親らしいあやし方だ。たとえ現実逃避だとしても、正しい現実逃避の方法だろう。彼女によれば赤ん坊は腹が減ったわけでもおむつ交換を必要としているわけでもなく、単にサイレンに驚いただけだろう、とのことだった。凪紗は慰めと励ましの声をかけながら赤ん坊の背中を本当に愛おしそうに撫でつけ、赤ん坊もそれに応えて静かになる。

おむつ、車に積んであったっけ――いいや、荷物が多いから下ろしてきちゃったよ――そっか、じゃあ買ってくる。抑揚のないやり取りをして凪紗はドアを開けた。長時間留まることに賛成できなかったが、逆上されても厄介なので藤内は黙って頷いた。赤ちゃん、見ておいてね――そう言い残して降りようとした凪紗はふと思いついたように動きを止め、目を見開いて藤内に呟く――見る、の意味は、わかるよね、この子が嫌いなのは知ってるけど、放っておかないでね。

赤ん坊と二人で取り残され、藤内は振り返ったまま停止する。赤ん坊は泣き止んでいるものの完全に覚醒してしまったらしく、細い目でこちらを見返していた。じりじりとした時間を過ごしているとどうしても生活の悪臭に意識を遣ってしまうが、赤ん坊は平気らしい。

不意に突き出された、未完成の腕に驚き、こむら返りを起こしたような滑稽さで仰け反る。遠目に観察するのが精一杯だった。赤ん坊が初めて姿を現してから三ヶ月ほど経つのに未だ慣れない。子ども嫌いではないはずだった。この痛痒に似た忌避感は自身の子どもにだけ向けられてしまう。思わず、独りごちるように問いかける――きみは、いったい、誰の子なんだろう。それは笑えない冗談ではなく、宛先のみが欠けた本心の問いだった。しかしそれ以上には進められない。凪紗の不貞に対する報復を、不法な暴力以外に還元する方法など今生思い浮かばないだろう。諸々の手続きは可能だが、それらは少しも報復ではない。十全に発散させる余地は、この現代社会に存在しない。だからこそ激情は自ら抑圧しなければならなかった。その激情は、稚拙な隠匿で騙くらかせると思われていた自分自身や、我が子である可能性がゼロであるというわけではないこの赤ん坊に対するものでもある。だからこそ不感症を演じて堪えてきた。もう少し辛抱すれば憤懣の一部は除去されるはずだった。

スマホが震え、藤内は反射的に座席から腰を浮かした。

相手は峰屋だった。真剣な声色で遅刻を咎められ、凪紗や赤ん坊の事情を盾にしてなんとかやり過ごす。なるべく早く来てくれ、これでも不安にはなるんだからな――峰屋は溜め息交じりの呟きを残して電話を切った。

やがて凪紗が戻ってきた。悠長な手つきでおむつを取り替え始めるので、峰屋から連絡があったことを伝えて急かすが、意に介する様子はない。やはり赤ん坊への慈愛よりも空想への撤退の色が濃いのかもしれないと思ったとき、彼女はそれを証明するような疑問を口走った――赤ちゃんって、どうしてこんなに泣くんだろ。

生まれてしまったからだろうね――焦りに駆られているせいもあって一糸纏わぬ本音で返してしまう――親の注意を惹きつけて自分を庇護してもらう、淘汰に抗う手段なわけだけどさ、そうは言っても消去法的な最終手段に過ぎないんだよ、なんでそんな方法を選ばされたかと言えば、やっぱり産まれてしまったからとしか言えないだろうね、けれどそれが厄介なのさ、新しく群れのリーダーになったサルは、前のリーダーの子を殺す、泣き声が殺意を喚起するんだ。

凪紗を後部座席に留め、車を出した。国道をひた走ってすぐの交差点を右折し暗がりにをひた走る。切り損ねたラジオが定時のニュースで社会保障の話題を取り上げている。

神隠し――肩越しにトランクのボストンバッグを見つめながら凪紗が言う。そのまま、藤内の方を見ず、滴るような途切れ途切れの調子で喋り続けた――神隠しってさ、単語使ったテレビ、新聞だっけ、炎上してたな、不謹慎なんだって、まあでも、そういうのでキレて叩く奴、絶対、オジオバだよね、暇なオジオバ、絶対……。

本気になっている者など一人もいなかったのではないか、と藤内は思う。巷間の九分九厘は部外者で、当事者は言葉尻にかまける余裕もないだろう、そんな悪辣な視力を発揮させて怒る連中というものが実在するとは到底考えられない、とただただ思う。

指定された合流地点は公民館の裏手にある小さな公園だった。多くの遊具が撤去されて空き地然としたその入り口に、トレンチコートを着た長身の峰屋が立っていた。彼も、しっかりとボストンバッグを提げている。

峰屋はトランクに荷物を無雑作に投げ入れてから助手席に乗るなり、ひとしきり遅刻へのクレームを捲したてたが、凪紗が宥めると意外と容易に落ち着いた。藤内は再び車を出発させ、それとはなしに二人の会話を耳に落とし込む――でもさ、今日は一人でやりたいからって予定変えたの、峰屋くんだったよね――そうだけどさあ、こんなに家ばっかになってるなんて知らんかったもん――え、じゃあなんでここ選んだの――昔、小学校時代に一瞬、この辺に住んでたんだよな、そのときはちょうど良い田舎って感じだったんだけど、いつの間にか開発進んでたんだな――やめとけば良かったじゃん――それだと無駄足だろ、それに、今回はまだ見つかってないんだぜ……ていうか藤内、情報教えといてくれよ、ちゃんと相談したよな――強い調子で肩を叩かれ、危うくハンドルを切り損ねそうになる。峰屋は革製の、厚手の手袋を嵌めていた。国道へ車を走らせながら藤内は無難に取り繕う――僕も知らなかったんだ――まあ結果、上手くいったからいいけど――峰屋は手袋を外しながら嘯き、それから唐突に窓を開けて外に左腕を出して、思い切り振り乱した。呆気にとられた藤内たちに弁解する風でもなく、彼は生理的嫌悪を露骨に表して顔を歪める――髪の毛ついてた、さっきの奴の茶髪、じかに触ったわ、最悪――それから何故か、藤内の方を向いて舌を出した。

峰屋は、彼にとっては狭すぎる助手席でも相変わらず落ち着きなく振る舞っていた（三年ほど前、仕事場で知り合った頃からそんな具合だった）。身をこごめてあくせくとトレ

ンチコートを脱いだかと思えば、車内に充満した生活の悪臭に不満を漏らし、次の瞬間には予兆もなしに赤ん坊へ振り向き緩慢な笑みを浮かべている――かわいい顔してるなあ――ええ、全然でしょ、昔の私に似すぎ――さっきまでの愛情を水泡に帰すような無愛想さで凪紗は呟き、右手の親指と人差し指を下まぶたにあてて伸ばす――もうちょっと大きくなってたら、切開したいって言い出してたかもね。

峰屋はもう聞いておらず、今度は藤内にこれから向かう場所を確認する。行き先の地名を口にするのはこれで何度目だろうか。彼には、最初から記憶するつもりなどないのかもしれなかった。

国道へ舞い戻り、更に走り続ける。三叉路で県道へ進むと一気に交通量が減った。高層建築物は見当たらなくなり、まばらな住宅の、寝屋の抑え気味の電灯が点々と目立つ。少しだけスピードを上げた。あと三十分もすれば到着する目算だった。

凪紗と峰屋は間断を置かず会話を続けていた。急ぐべき話は一つもなく、昨日でも明日でも通用するような話題ばかりであるように思える。時折峰屋の、野卑とすら感じられる大笑いと凪紗の追従笑いが生まれる。藤内は、雑音としてひたすらに聞き流していた。やがてセルフスタンドが見えたのでハンドルを切る。凪紗と峰屋は停車したことにすら気付かないかのように喋り続けている。藤内は努めて無心を保ちつつ車を降りた。

作業を終え、運転席に戻ると、何か笑い話でも聞かされたのか凪紗は高揚していた。峰屋の無鉄砲な性分が良く効いたのかもしれない。喫茶店で休憩しているかのような嬉々としたテンションで、彼女は長話を始める――莉々亜（りりあ）っていたじゃん、高校の同じクラスだった子、この前久しぶりにライン来てさ、結婚しましたって、妊娠しましたって、結婚式参加してくださいって、あからさまにコピペっぽい文章でさ、まあもちろん欠席するって返したんだけどさ、それでちょっと気になって久々にあの子のインスタ見たんだよね、そしたら婚約者とのツーショット載せててさ、相手がめちゃくちゃジジイで、三十は年上だと思う、本名載ってたから調べたんだけど、どっかの社長っぽい、確かにそんな感じの顔だったな……マジでキショい。

不意に藤内は口を挟む――莉々亜って誰かイジメて退学したんじゃなかったっけ――そうだよ、私たちの一個下の女子が自殺したんだっけな、あんまり憶えてないけど――バレてないのかな、その社長に――バレないでしょ、だってほら、芸能人とかもよく昔イジメられてたとか言うけど、誰がイジメてたかなんてバレないんじゃん、芸能人ですらそうなんだし、て言うか、だからこそジジイ社長とはお似合いだよね――でも、一生安泰だよ、

成功じゃないのかな、その子にとっては――でもキショいよ、成功ってキショい、全体的に。

嫉妬しているわけではなさそうだが、そうとしか思えない（もしくは藤内を当てこすっているような）節回しだ。元来体調が脆く抗鬱剤と睡眠薬を常用していた凪紗は、妊娠が発覚して以降ますます伏せって過ごす日が多くなり、産休が使える期日まで待てずに会社を辞めた。そのような理由で藤内の収入が急に増えるわけでもないし、仕事量でいえばとうの昔から臨界状態だった。薄暗いオフィスの硬く変色した丸椅子で、深夜までキーボードを叩き続けてなお凪紗の穴を埋め合わせられるほど稼げるわけではないし、あまつさえ満ち足りる気配などまったくない。少なくともこの人生で、藤内と凪紗が莉々亜のステージへ到達するのは不可能に思えた。一度の離別を挟むとすれば話は別だし、その場合の主導権は藤内にあるはずだが。

なあ、そっちの窓も開けてくれよ――藤内の肩を小突いて峰屋が、場を統率しているような雰囲気で指示を出す――相当臭いぞ、よくお前ら平気でいられるな、その子はなんで泣き出さないんだよ。生活の悪臭の話題が出るたび凪紗の顔色が瞬時に沈むのがバックミラー越しでもはっきりとわかる。藤内は会話を打ち切って開閉スイッチを押す。ラジオは相変わらず音楽を流しているようだが、風切り音に紛れていよいよ聞きとれない。

じりじりとしたカーブを描くトンネルを抜けると、闇を湛えた山の影が眼前に聳えていた。異様なほど巨大に映るが、標高はそれほどでもないはずだ。なだらかな稜線が延々と続いているせいでそう見えるのかもしれない。

あの低山の中腹あたりに廃棄された寺があることを、三人の中で藤内だけが知っていた。今では滅多に人が寄りつかないその寺の、本堂の裏手は崖になっており、眼下には人の手が入っていない雑木林が広がっている。かつて地元では自殺の名所とも目されていたが、昨今その類いの噂はめっきり漂白されてしまったらしい。

なんでそんなところ知ってるんだよ――一週間前、ボストンバッグを棄てる場所の候補として挙げた際、好奇の声色で峰屋に訊ねられて藤内は返答に窮した。半年以上前、凪紗の不貞の証拠を掴んだ際に自らを投棄するための候補地を探していたことなど（まして実際に一度、足を運んだことがあるなど）恥ずかしくてとても言う気にはなれなかった。どのように弁解したかはよく憶えていない。しかし下手な言い訳を凪紗と峰屋が鵜呑みにしたのは確かだった。

妊娠を告げられた日の夜、藤内は睡眠薬で寝入っている凪紗の指を使って彼女のスマホ

のロックを解除した。下卑た好奇心ではなく芯を食った猜疑心だった。そして藤内は彼女のラインに不貞の証拠を発見した。複数人を相手にした、明々白々とした火遊びの履歴が並んでいる。皆偽名と思われるアカウントでやり取りをしていて、本名を使っているのは凪紗だけだった。

数多の情愛の文章は数分と見ていられなかった。藤内は凪紗に気取られる前にスマホを消灯する。そして眼前で熟睡する彼女を、突き立てるように睨めつける。未だ美しく見えてしまう彼女に、行使できる手立てなど何もなかった。藤内は自分の身の程を心得ている。性分と体格と、他者の視線を勘案できる。彼女を棄てることは、自分が棄てられることと変わらない。自分たちは釣り合っているのだろう、その思いは藤内を廃寺へ向かわせ、しかし自己投棄には至らしめられなかった。

なあ、これ読んだか――視界の片隅がスマホのディスプレイで照らされたが、藤内は一瞥もくれずに首を振った。峰屋が自分たち三人のニュースを示しているのは明白だった。彼はタイトルを読み上げる――相次ぐ乳児失踪事件に戦慄走る、神隠しではないかという声も――『神隠し』という言葉が出た瞬間に凪紗が短く、吹き込むように笑った。彼女はテレビか新聞、と言っていたが実際はもう少し低俗なメディアの記事だったようだ。

複数の県を跨いで発生している連続乳児失踪事件は発覚から約二ヶ月が経過しているが未だに解決の目処が立っておらず、全国で不安の声が相次いでいる――峰屋は拙い調子ながら、どこか頑迷な意志を持って読み続ける。現場付近で不審な黒い車両が目撃されたことを含め、藤内たちには完全に間違っているとわかる情報が連なり、最後に犯罪専門ノンフィクションライターなどという肩書きを名乗る専門家のコメントが記されているようだった。峰屋が舐めるように論評していく――「まずは行方不明となっている被害者が全員無事に戻ることを祈っています」……しらじらしいな、無理だってわかるだろ……「公開されているだけでも四名の被害者が確認されており」……残念、五人だし、なんならさっきもう一人増えた……「同一犯による犯行である可能性が非常に高く」……正解……「捜査が極めて難航していることを踏まえると、手慣れた者による犯行であるとも考えられ」……残念、というかこの国に手慣れてる奴なんていないだろ……「生後間もない乳児ばかりが被害を受ける失踪事件は過去に類を見ず、そのため疑わしい情報が拡散されやすい状況になっています。過剰に怯えることなく、落ち着いて情報を精査することが何よりも重要です」……いや、どうやって精査するんだよ、それ以前にお前らは煽ってる側じゃん、

やっぱりクソしらじらしいな。

私もちょっと調べてさ――軽薄だった峰屋に感化されたのか、凪紗の口調もどこか爛々としている――犯人の動機が不明なんだって、身代金目的の誘拐ではないみたいだけど、ペドフィリアの犯行にしては被害者が多すぎる、そもそも赤ちゃんを連れ去るのは大人を連れ去るよりもリスクがあるらしくて、大人と違って赤ちゃんは自分の意思で動けないし、保護者がすぐに気付くから発覚しやすいって……。

峰屋はせせら笑いながら聞いていた。そして彼女の声がしぼむと一層高く笑った――確かに危なっかしいな、その発想はなかった。藤内は目を細め、悟られないよう小刻みに首を振る。発想は、あったはずだ。こんなやりとりを、三ヶ月で何度も繰り返してきたのだから。

藤内は、峰屋が何も（自分自身へのリスクを含めて、本当に何も）考えていないことを再確認する。そして改めて自分たちの現在地を訝しんだ。何故まだ誰一人捕まっていないのだろう。

運が良いんだなあ、俺たちは――出し抜けに剽軽な声をあげた峰屋に、凪紗が同調する――もしかしたら神様の思し召しかもね――神様ってなんだ、どれだよ、キリストか仏か――神様は社会だよ、世の中さ、多神教の観念にだってぴったりだ、そういうものだろ、僕らの宗教観なんて――藤内が苛立ちを隠しきれていない横槍を入れたせいで、会話は寸断される。

いずれにしても、神のおかげだなんて思いたくないな、僕の知っている神様はもう少し道徳的だ――捨て台詞のように言って、藤内は回顧に耽る。あの日は、誰にも責任転嫁できない失敗の煮凝りが午前から明るみに出た日だった。楽観が芽吹いて立ち直ろうとするたびに、上長の罵声や同僚が自分に代わり電話越しに頭を下げて繰り返す謝罪や冷淡に差し向けられている視線や、何よりも零落した自我に叩きのめされる、そんな日だった。そんな日は凪紗の腹が膨らんでいくにつれて頻度を増やしており、もう珍しくない。珍しくないからこそ、最早藤内の情緒は限界を超えて摩耗していた。

取り立てて藤内を責めなかったのは峰屋だけだった。互いが高校の同級生であったと知ったのは同期で入社したあとのことだ。自然と縁が強まって、凪紗（彼女は高校時代から峰屋を知っていて、時折連絡を取り合う程度の関係は保っていたらしい）も含めてプライベートでも交流するようになったのだが、社外での彼の態度は存外居丈高で閉口させられた。彼はスパルタ気味の運動部出身であるらしく、その時点で藤内とは出処や生活圏を異

にする男だった。だからといって表立って揉めるような真似はせず、できるだけ穏健に関係を継続させた。小規模の会社で、唯一の同期といざこざを起こすのが得策でないことぐらい、藤内にもよく認識できた。

加えて、藤内は峰屋に一種の憧憬を抱いていた。謙遜気味に見積もっても自分より彼の方がミスの回数は多い。それでも彼は気丈で、何事もなかったように振る舞うことができる。そういう長所は、今更人格をひねくったぐらいで身につけられるスキルではない。

ある日あの夜、鬱積した空間からようやく解放され、深まった時間の人いきれ甚だしい電車に二人で乗り、最寄り駅まで戻ってきたところで、たまりかねた峰屋に誘われて居酒屋へ立ち寄った。それほど見窄らしい表情をしていたのだろう。凪紗に対して悪いと思う気持ちもあったが、何よりもまず癒えなければどうしようもなかった。たちまち酩酊し、惰性で更に杯を重ねた。会話はほとんど交わさなかった。時々便器に嘔吐して補うように飲酒するのを、ひたすら反復するばかりだった。

疲弊だけでは説明できないような酔いっぷりで、店を出る頃にはもう、駅前で駅を見失うような有様だった。どちらからの提案かわからないが、ともかくしばらく周辺をふらつき歩くことになった。峰屋も藤内に負けないぐらいには酔っていたようだ。普段から背負っている大きなリュックサックに引っ張られて時折転倒しそうになっているが、手を差し伸べる余裕はなかった。

そのまま酔歩を続けて、気付けば見慣れない住宅地まで辿りついていた。林立する建造物の彼方に開けた場所が見える。誘蛾灯へ導かれる羽虫のように、二人の足はほとんど一斉にそちらへ向く。

公園だった。四方をフェンスに囲われ、球技に使える程度の広さがある。三原色で彩られた小さな滑り台が唯一の遊具だった。鈍重に首を回してベンチに向かおうとしたとき、それまで頼りなく身体を揺すっていた峰屋が凄まじい速度で腕を振り上げ、ベンチとは真逆の方向を指差した。

その先、嫌味なほど煌々と光る街灯の下に何かがある。目を細めるとそれがベビーカーであることがわかった。藤内はたじろいで立ち止まったが、峰屋は大股で近づいていく。ただでさえ大柄な彼の後ろ姿は、獲物を見定めた熊のような威圧を醸していた。

果たして、座席には乳児が納められていた。退っ引きならない事情でやむを得ず放置されたのだろうが、それにしても異様だった（被害者家族の後ろ暗さが反映されたのか、このケースだけは詳細に報道されていない）。あまりの異様さに二人して笑った。その笑い

は徐々に高鳴りながら尾を引いて出口を見失い、迷宮と化す。何が面白いのか、振り返ってもわからないし、当時もわかっていなかっただろう。

酸素が途切れるほど笑い尽くした瞬間、臨月で膨らんだ腹をさする凪紗の姿が見えた。彼女の中で息づいている赤ん坊の姿すら見えたような気がした。奥底に封じていた、凪紗の背徳的な企みに対する名状しがたい感情が胎児にまでも伝播する。

刹那、二人に対する暴力的な嗜虐心が一斉に発火した。

それから何を起こしたのか、少なくとも藤内の理性は憶えていない。気がつくと外套のスマホが震えていた。

電話越しの凪紗は妙に落ち着いた調子だった――今、電話できる――どうしたの――忙しかったらあとでもいいんだけど――いや、別に大丈夫――残業してるの――だから、用事はなんだよ。気圧された彼女は数秒黙り、そしてようやく陣痛が始まったことを告げた。途端に視界が明瞭になり三半規管も我に返った。生存本能のようなものが駆動したのかもしれない。よろめいて立ち上がったあとに、今まで横たわっていたと気付いた。隣でじっとしている峰屋に事の次第を報告する。未だベビーカーを見下ろしている（そのときにはもう、座席は空になっていたような気もする）彼はこちらを向かず念仏のように口の中で言った――そうか、それは大変だ、人生で一番大変だ、さっさと行ってやれ、こっちは俺がなんとかするから。

峰屋の言葉になんら違和感を持たず藤内はその場を離れる。配車アプリを見るが一時間以上待たされるようだった。やむを得ず地図を確認して駅前まで、縺れた足取りで引き返し、そこでようやくタクシーを見つけて乗り込む。

アパートまで五分とかからなかった。路上に車を待たせて階段を駆け上がる。息せき切ってドアを開けると、リビングのソファに座っていた凪紗が鋭く振り向いた。期待で輝いていた表情は、しかし見る間に萎びて白けた無表情に変わった。

そこでようやく藤内は、自分の致命的な酒臭さに気付いた。相貌も、泥酔で青白くなっているはずだ。見下ろすと、全身が砂利に塗れている。端的に弁明できる姿ではなかった。

なおも付き添おうとする藤内を凪紗は丁重に他人行儀に、最後には突き放すように拒絶し、入院用のキャリーケースを引いて一人で部屋を出た。タクシーを待たせていると告げると、彼女から淡泊な優しさが返ってきた――早く寝て、明日も仕事があるでしょう。最初は指示通りにすべくシャワーを浴びて布団に潜り込んだが、そう簡単に眠れるわけがな

かった。重なった失敗と不甲斐なさ、凪紗の、会社の誰よりも冷め切った目つき、看護師に陰口を囁かれているかもしれないという妄念。目を閉じてもそれらが執拗に襲いかかってきて一向に睡眠を許さない。目を開けると周到に準備されたベビー用品が群れている。新生児用の紙おむつ、ベビーベッド、取り付けられていないチャイルドシート。臓腑で荒波を打つ吐き気と疼痛はアルコール由来ではなく、まだ見ぬ未来に原因があるように思われた。

チャイムが鳴り、震え上がるようにして跳ね起きた。アパートの廊下には峰屋が、どう見ても虚飾の笑顔で立ち尽くしている。藤内が何かを問う前に彼は手で道を空けるよう命令した。他人の酒臭さはやけに腹立たしい。無言でリビングまで突き進んだ峰屋は、さっきまで凪紗が座っていた位置に勢いよく尻を落とす。そして芝居がかった身振りでリュックを下ろした。

なんだよ――怖じ気づきながら問う藤内に、峰屋は首を振った――もう二度と開けたくないな。当時の彼にはまだ、遺体に対する生理的な忌避感があったようだ。代わりに彼はスマホを操作して一枚の画像を藤内の鼻先に突きつけた。それは暗闇に溶けかかった赤ん坊の写真だった。暗闇で撮影されていて顔つきはほとんどわからないが、どこからかの光源で口元だけは鮮明だった。口の端に灰白色の唾液の痕が広がっている。

数秒見つめたあと、ようやく脳内が晴れ渡った。両手が自然と細い首を覆う形をつくり、掴んだ空気に肌の感触を覚える。その瞬間の記憶があるわけではない。しかし動機だけははっきりと覚えている。絞殺の光景が、想像を多分に交えながらコラージュ写真のようにぎくしゃくと組み上げられ、すぐ記憶として定着する。

連れてきた――峰屋は顎でリュックを指し示しながらそう言い、問い詰めようとする藤内に向かって突然怒気を炸裂させた――こうでもしないと俺だけ捕まっちまうだろうが。

衝撃に酔った藤内に、夜更けに構わず吠え散らす峰屋を説得する余力などない。それ故不承不承彼に従ってリュックを預かることにした。寝室へ運んで、ベビー用品の群れを避けておろす。それは最初の棺であり、墓標となった。

藤内にとって、峰屋の行動はまったくの徒労でしかないように思えた。足掻いたところで無駄だ、粗雑な犯行など簡単に露見する。今自分たちにできることは、覚悟を決めることだけだ。しかし藤内の現実的な推測とは裏腹に、二人が檻の中へ放り込まれる顛末は未だに訪れていない。アパートに聞き込みの連中が来ることさえもないまま、三ヶ月が過ぎていた。

不可解な捜査の遅延を、峰屋は自分の手柄だと誇っている。結果的には間違っていなかったのかもしれない。あの場に残ったのが藤内ならば逃げ切れる可能性など予想もできず早々に白旗を揚げていただろう。しかし、それは峰屋の仕事が巧妙だった証左にはならない。彼は故意に痕跡を残すような真似こそしていないだろうが、入念に証拠隠滅をおこなったわけでもないだろう。赤ん坊をリュックに押し込めたとき、周囲を確認したかすらも定かではない。

事件は確かに僕たちが起こしたことだけれど――いつの間にか藤内の考えは車内に漏れだしている――僕たちの意思とは関係ない何者かの意図が働いているように思えて仕方ないんだ、神様の差し金だとか信じたくないけど、そうでもなければ割に合わないのかもしれない、だってこんな運命は、なんというか、身に余る……。

凪紗がうんざりした風に溜め息をつき、峰屋がにやけきったまま口を開く――身に余る偶然なんて誰にだって起こるものさ、宝くじで十億稼いだ奴だって何もかも理解できなくなるだろうさ、人生とか道徳とか、それまで信じていた一切合切がな、幸福が善人から順に舞い込むってでもないしな、何だってそうだろう、努力がどうとか、強い志がどうとか、そんなものどうせ、全部後付けなんだから――だからってここまでグロテスクな幸運が存在していいはずがないじゃないか――いくつになってもお前は純粋だなあ、じゃあこう言い換えればわかるかな、俺たち一人ひとり、全ての生き様が身に余る偶然なんだよ、宝くじとか未解決事件とか、そういう派手なものばかりじゃなくてさ、二十五年も生きてれば今の自分が、無数の選択の果てにできた、他にない特別な人間だってことぐらい、体感で理解できるだろ。

それは奇妙に楽観的な人生論で、凪紗は納得したらしいが藤内にとっては首肯しがたい理屈だった。しかし反駁している余裕はない。車はもう麓の、細くうねる上り坂に入っていた。ここから更にアスファルトを外れ、林道を進む必要がある。一度の往復経験（あまつさえ、そのときは昼間だった）だけでは心許なく、運転に集中しなければならなかった。

車は落ち葉を轢き潰しつつ、不規則に揺れながら前進する。一台通行するのが精一杯の林道は、とっくに打ち棄てられているはずであるにもかかわらず、緊張をほぐす程度には均されていた。それでも視界は開けていない。ヘッドライトに照らされた野藪の景色だけが頼りだった。

目的地が間近に迫ったのを悟ったのか、凪紗と峰屋も黙り込んだ。凪紗はチャイルドシートの縁を撫でつけ、峰屋はスマホのディスプレイを指で無闇に上下させている。

ラジオを切って――不意に凪紗がかすれた叫びをあげる――はやく、はやく切ってよ、もう聴きたくない、もういや……。

ずいぶん前から寒風の勢いが弱まり、ラジオの歌が鮮明になっていることに、藤内はようやく気付いた。今でも随所で流れているであろう、昭和の名曲が飽きもせずに放送されている。少しためらってからラジオを切った。両側から伸びる枝葉が時折車体に衝突する、不気味に乾いた音と凪紗の荒い吐息が際立つ。絶え間なく湧く生活の悪臭に入り混じって、峰屋がミントの香水の甚だしい香りを纏っているのが、意識下に初めて強く穿たれた。必然的な閉塞感は藤内に、最早後戻りできる余地など残されていないと宣告しているかのようだ。しかしいったい、いつならば後戻りできたのだろう。

それで――峰屋が嘲笑混じりに、唸るように言いながら身体ごとうしろを向く。彼はおそらくチャイルドシートと凪紗の中間あたりを見つめている――それ、いつ殺すつもりなんだ、生きたまま放り投げるのか、俺は家で殺してくるもんだと思ってたんだけどな。

その瞬間、藤内の中で巨大な破滅願望が爆発的にせり上がる。いっそ何かのはずみで道を踏み外し、三人諸共転落してしまえれば。しかしそれは所詮願望の域を出ず、実行には至らない。代わりに彼は焦点を近づけてバックミラーを注視する。暗がりに混ざった凪紗の顔は凍りついていて、鎮まりかけていた息遣いがまた激しくなった。峰屋が乱暴に腕を突き出して何もない空間を握りしめる――貸せよ、俺がやってやるから――いい――凪紗は短く拒否した。それから更に攻撃的に言い換える――誰かに貸すなんて、絶対にいやなの。

車を止めようか――藤内は胡乱に申し出る。凪紗への気遣いというよりは、あくまでも自己弁護めいた言葉だ。しかしそれに対する彼女の返答も似たようなものだった――そのまま走らせて――それでも藤内が減速させようとしたところ、幽暗に沈んだ彼女は遂に捨て鉢に吐き捨てる――いいから、走れよ。

藤内は全てに対して諦めを滲ませて前だけを向く。ロービームの範囲内に限られる視界の隅に何か（手袋か、スニーカーぐらいのサイズ）が転がっていたが、気を遣る余裕はなかった。焦燥が恐怖を圧倒している。チャイルドシートのベルトが小気味よい音をたてて外れる。

別に大丈夫――誰かに何かを問われたわけでもないのに凪紗は言った。大丈夫、の後半あたりで声色が力んでいた。赤ん坊を持ち上げたのだろう。藤内の双眸はいよいよ前方に固定される。集中すればするほど視野が狭まる。背後で彼女が優しげに囁いた――最初か

らこうするって決めていたんだもの。
いや、決まっていなかった。その計画は三人の心中で漠然と蠢き続けていたが、本決まりになったのはつい数日前のことだ。
三ヶ月前、最初の事件から少しして、凪紗は一連の事件に於ける二人目の被害者の首を絞めた。それも彼女の自発的な行為ではなく、峰屋の指示にただ従っただけだった。藤内に彼女を巻き込むことへの抵抗感がなかったわけではない。しかし結果的には彼に説き伏せられてしまった――罪の意識は平等でなくちゃいけないんだ、じゃないと持たない者から先に足抜けしていくからな――彼女はそんなことしないよ――お前はそう思えるだろうな、だが俺はどうなる、一人で捕まるような羽目になったら俺は洗い浚い白状してやるからな。
凪紗が全ての事情を聞かされたのは退院直後のことだった。もちろん、当時の彼女には真っ当で道徳的な選択肢がいくつもあった。藤内と峰屋を通報することは乳児を殺すよりいくらか容易だっただろう。しかし彼女はそうせず（混乱に苛まれてパニックを起こすことすらせず）、代わりに二人へ訊いた――私がやったら二人とも満足するんだよね。そうして峰屋がどこからか攫ってきた乳児を、凪紗はアパートのリビングで殺した。藤内が残業で家を空けているあいだの出来事だった。彼女は、峰屋が雄弁に手筈を語るのを聴きながら、あくまでも一人でやり通したという。藤内が帰宅したとき、赤ん坊の眠る部屋の壁際、リュックの隣にボストンバッグが一つ、増えていた。
乳児の行方不明が報道されるようになったのはこの頃で、警察も動きだしたらしかったが、それ以上の進展は一向に起きていない（世間的には、凪紗が殺した赤ん坊こそが最初の被害者ということになっている）。そしてそれ以降、藤内と凪紗は一度も手を汚していない。あとの四人は全て峰屋単独での仕事だった。彼は殺人の快楽に酔い痴れていたのだろう（殺人の快楽とは、あまりにも安易な連想かもしれない。しかしそれ以外に、無謀な大量殺人者の動機を推し量るにふさわしい節回しが存在するだろうか。実際、彼には殺害前の赤ん坊の写真を撮影する性癖が生じていたらしく、それを豪語すらしていたのだ）。
高校卒業後すぐに結婚して妻や子と暮らしている峰屋に遺体を隠しておく場所はなかったから、それらは全て藤内たちで管理しなければならなかった。彼はフリマサイトで中古のボストンバッグ（赤ん坊がすっぽり入るとわかっている、全く同じ商品）を都度買い足し、自身の成果物を入れてからアパートへ持ち込むようになった。犯行は常にどこか稚拙

だったようで、彼がバッグを運んでくるより先に事件（少なくとも、乳児が行方不明であるという事案）は報道されていた。意図していたわけではなく、単純に知識と技術と準備が足りなかったのだろう。

峰屋は絞殺を成功させると、グループラインに二つの記号を送ってきた。赤ん坊の絵文字と、デフォルメされたクマのキャラクターが親指を立てているスタンプ。それを見るたびに藤内は悪化していく状況が、抑制の効かない狂気が明るみに出るよう祈っていた。

乳児たちの棺は壁際に並び立っていた。有機物の残骸が遠からず、鼻腔に張りつく悪臭を放つようになることぐらい、藤内も知っていた。それは甘ったるい悪臭であるらしい。あの日の数日後、リュックから想像通りの臭いの端を嗅いだとき、藤内には待望していた福音が訪れたように思えた。甘い悪臭は日を置かず、室内から外部へ突き抜けて嗅覚の狼煙になるはずだった。

しかし、そうはならなかった。遺体から立ちのぼる悪臭は勢いを増さない。あまつさえ、本来なら屍肉から滲む溶液で濡れるはずのボストンバッグは乾ききっており、内側に蛆が集っている気配もない。時期が真冬であることだけでは説明がつかないように思われた。何しろその部屋は赤ん坊が眠っていられるほどに温かいのだ。

自身の鼻を疑うこともした。知らぬ間に吸着した悪臭が、職場の人間に気取られる可能性も考慮したが、周囲には一言も告げられなかった（体臭の指摘はセンシティブだから誰も口に出さなかっただけかもしれないが、少なくとも耐えがたい臭気ではなかったようだ）。棺の数が増えても事態は変わらなかった。臭いは残り火のように微かで、しかし確かな存在を醸したまま藤内の顔のあたりで蠢くばかりだ。それは外出しても決して掻き消えてくれなかった。

神だとか奇跡だとか、そういった苛立たしい何かしらに藤内が初めて想いを馳せたのはそのときだった。信仰心が芽吹いたわけではない。身の丈に合った自然の法則がそうさせているはずだと確信していたものの、率先して調べるつもりにもなれなかった。もちろん、バッグの蓋を開けて中身を確認するなど、あまりにも怖ろしい。そういった行動は自分たちを包み込んでいる偶発的な救いを退けてしまうかもしれない……いっそのこと破滅してしまいたい藤内はその実、具体的に破滅へ近づく手段を何一つ取ることができないでいた。

藤内に想定通り（或いは、峰屋の計画通り）、凪紗は二人を裏切らず、淡々と日常を過ごしていた。臭い、気にならないの――藤内が訊いたとき、彼女は怪訝そうな表情で沈黙を貫いていた。彼女には何も臭っていなかったのかもしれないし、ただただ諦観していた

だけなのかもしれない。

バッグの始末については前々から峰屋に進言されていた。しかし死体遺棄に適切な場所に心当たりなどない。のらりくらり躱しているあいだに峰屋は、まるで急かすように棺の数を増やしていった。山間の廃寺は消去法で導き出した最終手段だ。自己投棄に失敗した場所に凪紗と峰屋を連れて行くのは羞恥の極みだったが、やむを得なかった。

そして藤内が提案した候補地を二つ返事で承諾した峰屋は、赤ん坊に対する具体的な計画を初めて口に出した。赤ん坊は当然藤内にとっても我が子である。だから抗弁の権利はあったのだが、藤内はほとんど唯々諾々と了承した。考えていたことは一つだった。つまり、我が子がいなくなればさすがに誰かが気付いてくれるだろう。被害者になることは加害者として晒される末路への最短距離であるはずだ。この事件はようやく進み、終わってくれるに違いない。

自分の考えが畜生じみていることを藤内は認めていたが、だからといって今更真っ当な道へ戻る手段など探せるわけもなかった。

この三ヶ月間、異様に平穏な日常で、凪紗はひたすら赤ん坊を育てていた。遠い未来の糧となる、精一杯の愛を注いでいたように、藤内には見えた。初めから殺す心づもりができていたとは到底思えない。

しかし凪紗は反対しなかった。峰屋の堂々とした口振りと、藤内の怖ず怖ずとした取り成しにほとんど躊躇わず赤ん坊を殺すことに同意した。心強いと同時に奇妙だった。思えば事件について彼女と口論したことは一度もない。彼女が何を考えているかわからないが、それでよかったのだろう。何かがわかってしまったら、きっと何もかもがより悪い方向で破綻していたはずだ。しかし、だからこそ運命への懐疑は消えない。

藤内の神に対する問いは強迫観念に似ていた。自分たち三人が神を捨てたのか、神に見捨てられたのか、それともこの世が丸ごと神の歓心を買えなくなったのか。

弱々しい空咳が二度、聞こえた気がした。これも無数の選択の果てであるらしい。

いったいどうしてこうなってしまったのだろう、自分たちはありふれた、幼稚な大人に過ぎなかったはずなのに。月並みな疑問だが事態は既に月並みではない。荒唐無稽な衝動に端を発した事件は進展せず、それ故に終焉もしない。何故終わらないのか、合理的と思える説明はどこにも見当たらない。ここまで悪化する前に、凪紗を殺しておくべきだったのかもしれない。

藤内はただただ、分相応の罰がくだることだけを願った。自らを裁ききれない自分たち

に対して、社会と名付けられた神（信じるに足る神が存在するとすれば、その正体は社会以外に考えられない）による、分相応の罰を。しかし依然事件は事件のままだ。自分たちは地獄に堕ちる道のりにすら乗り出せていない。警察も社会も神も自分自身も、いつまで経っても三人を黙認している。

後部座席は静まり返っている。凪紗の呼吸すら聞こえない。峰屋がどこか感傷的な息を深々と吐いて前を向いたのが、視界の端に見えた。忘我のような静寂が訪れ、三人のあいだで澱んでいた。到着した――葉でできた天蓋を抜けたあたりで藤内が機械的にそう言うまで、車内の時間は止まり続けていた。

星の輝きで微かに灰がかっている空を背後に、小ぶりな本堂があった。木板が剥がれ、苔に蝕まれて朽ちているそれは病巣の痛みに堪えながらなんとか屹立しているようにも見える。同様に慎み深いサイズの賽銭箱と石灯籠。右手に形の悪い石段が斜め下へ続いており、そちらが本来、ここへ至るための正しい道筋であるらしかった。

周囲に、申し訳程度に敷かれた石畳に乗り入れて裏手へ回り込んだところで車を止めた。生い茂る草木は鋭利な凍えを伴って、明らかに藤内たちを拒んでいる。打ち棄てられて幾分経った土地には徐々に、自然の秩序による無秩序な支配が回復しつつあるようだった。

ひとけを欲する、自家撞着めいた望みは即座に絶たれた。エンジンとライトを切らずに外へ出ると、二人も続いた。峰屋は一直線にトランクを開けてボストンバッグを、転がすようにして外へ出す。その様子を凪紗が、両腕に冷え続けていく赤ん坊を抱えたまま放心して眺めている。

六つの棺を藤内と峰屋が半分ずつ分担して崖際に連れて行く。藤内は二つのボストンバッグを両手に持ち、リュックを背負ったが、峰屋は一つを蹴り転がして運んだ。車のライトだけでは心許ないと思っていると、不意に光が足された。見ると凪紗がスマホのライトを点灯させて行く手を示していた。永久に脱力した赤ん坊を左腕一本で抱え、自分の心臓あたりに押し当てている。そんな彼女に対して藤内は純粋な畏怖を覚える。

崖は予想以上に切り立って、孤独に突き出ていた。飛び降りたとしても岩肌に身体をぶつけることなく地面まで直行できそうだ。二十メートルほど下には広葉樹の生息域が広がっているらしかったが、闇の中でそれは広大な空洞に見えた。彼方に、どことも見当のつかない街の灯りが明滅している。なるほど、ここだったら確かに見つからなさそうだ――そうだね――峰屋の感慨に軽く応じた藤内は、実際のところ逆の可能性を考えている。本気で発覚を防ぎたいのであれば、せめて土に埋めるぐらいの手間を掛けた方がいいことぐ

らい、子どもでもわかる。ここまで杜撰なやり口であれば、さすがに発見されるはずだ。ボストンバッグや遺体にこびりついた何かが、きっと自分たちのアパートまで案内するだろう。藤内の思惑はほとんど切望のようなものだった。

いつの間にか、凪紗が一足遅れて隣に立っている。断崖を包む冷気が静かに、腐食させるように藤内たちの肌を掻く。

峰屋が右腕をうしろに振り、勢いをつけてボストンバッグを放った。闇に投げ出されたボストンバッグが回転しながら宙を舞っているあいだに足下のそれも蹴り飛ばす。二つが樹海に沈んで葉を激しく揺らしたのはほぼ同時だった。彼は上機嫌に何事かを呟きながら頷いた。独自のゲームを楽しんでいたのかもしれない。残った一つは、ついでのように放っていた。

藤内はバッグを地面に置いてから順繰りに抱え上げ、厳かに、粛々と真下へ落とした。それを三回繰り返す。最後の一つはよほど角度が悪かったのか岩壁に擦れながら転落していった。全て終えた藤内は思わず両手を合わせそうになったが、すんでのところで思いとどまった。今やどのように振る舞っても正しくないのだろうが、それは最も悪辣な行為であるように思えた。

凪紗の番だった。彼女はまだ心臓に赤ん坊を押し付けている。まだ生きているのかもしれない、と藤内はふと思い、慌ててその妄念を霧散させる。ついで、代わりを願い出るか迷ったが先ほどの彼女の声が蘇ってやはり思いとどまった。彼女は更に一歩踏み出す。それ以上進む余地はない。藤内が肩越しに振り向くと峰屋は、まるで他に見るべきものなど何もないとでも言いたげな、無関心な装いで彼女の動向を見遣っていた。

ややあった空白ののち、突如凪紗の身体が前に傾いた。反射的に藤内が動いた直後、彼女は赤ん坊を手放した。赤ん坊は藤内の見ている前で瞬時に影と化して空洞へ消えた。衝突音は一番控え目だった。

凪紗はそのままの姿勢でしばらく空洞を覗き込んでいた。藤内は知らず知らず、今にも吸い込まれそうな彼女の肩を抱いていた。数十秒して彼女は、土を踏みにじるようにして向き直る。表情は、この距離ですら夜に紛れて読み取れない。彼女は自らに触れる手を持った。痛切に冷え切っていた。そのままゆっくり戻させて藤内に直立不動の姿勢をつくらせる。藤内は彼女の心中を読み取るための観察に徹している。

やがて彼女は髪をかき上げるようにして首を動かし、藤内の顔を見つめた。緊張しているようにも思える無表情だった。それから藤内の背に手を回して彼を抱擁した。太い筒を

覆うような、反応を許さない抱擁だった。

次の瞬間、背後から両腕が伸びて藤内の首を掴み、ためらいのない力で絞めた。革製の手袋の感触だった。慌てて抵抗しようとするが凪紗は四肢を拘束するように抱きすくめたまま微動だにしない。彼女を転落させてしまうかもしれない、という懸念が判断を鈍らせた。全員が一律に、喉を絞って獣のように唸っている。痺れていく脳が恐怖を出力するが、それもすぐに薄らいで何も考えられなくなった。生命力を費やしてもがき続ける。しかし凪紗は粘ついた重りのようになって決然と藤内にしがみついたままだ。

極彩色のモザイクが明滅する視界に一瞬、赤ん坊の姿が映る。つい先刻に息絶えた赤ん坊が生まれたばかりだったときの姿、赤々と火照った顔、閉じきった目。隣には疲弊と慈愛の籠もった凪紗の笑顔が添えられている。この三ヶ月で何度も夢の中で見てきた光景。藤内にとっては不安のあまりに叫んで飛び起きてしまう、悪夢。目を開けると現実にも赤ん坊がいた。甲斐甲斐しく相手をする凪紗もいた。藤内は呆然と二人を目で追う。豆電球の薄明かりに晒された赤ん坊は殊更奇怪に映った。

藤内は赤ん坊が、最初に殺した乳児の生まれ変わりであるという思い込みを最後まで拭えなかった。だから赤ん坊は生活の悪臭を（誰しも、自分の体臭に気付くのが難しいのと同じように）厭わなかったのだと半ば確信していた。それは復讐じみた願いですらもあった。

深夜、彼女は必ず、汗だくの藤内を一瞥しただけですぐ赤ん坊の世話に戻る。畢竟自分こそが遺児なのかもしれない、と半睡半醒の頭が嫌みたらしい結論を打ち出してもう一度眠り込むと翌朝、その結論に自己嫌悪しながら職場へ向かう羽目になる。見送ってくれる凪紗の表情は事務的で素っ気なく、それが尚更怒りを募らせる。最後に彼女を愛しいと思ったのはいつだったか。また、彼女に愛しいと思われたのはいつだったか。

ふと凪紗が藤内から離れて身軽になった。しかしもう腕を上げる力すら残っていない。捻転する視界で彼女の表情を捉えようとするが上手くいかなかった。凪紗の顔が見たくて仕方がなかった。命懸けで自分を殺そうとする彼女が何を考えているのか、それがどれだけ残酷な感情であろうと知りたかった。

尻に衝撃を受けてつんのめる。誰かが背中を押したような気がした。

蹴り出されたと気付いたときにはもう、藤内は宙に浮いていた。

※

遙か下方で打擲音が鳴る。彼は広葉樹のマットを突き破って地面に叩きつけられたようだった。軋むようなエンジン音だけが響く中、それはボストンバッグの落下音よりも鈍重で生々しかった。凪紗と峰屋は息を上がらせて立ち尽くしたまま、しばらく黒々とした林藪を眺望していた。

凪紗がじりじりと後ずさりながら、脈絡なく呟いた――見つかっちゃうかも――そんなわけない、ここまで思い通りに上手くいったんだ、これからも上手くいくさ、俺は藤内と違ってポジティブだからな、世の中、最後はポジティブな奴が勝つようにできているものさ――怖いよ、いやだ、捕まりたくない、私、まだ若い……――全て言い終える前に凪紗は細く長く呻きだす。顔のあちこちが歪み、思い切り目を閉じた瞬間に涙が氾濫した。両手で自らの腿に爪を立て、裂けるほど強く握りながら泣き続ける。

峰屋は再び手袋を外した。そして凪紗から漏れ出る悲鳴を塞ぐように、彼女を正面から強く抱き締める。彼女の顔を無理矢理胸に埋めさせて決して離れないように後頭部を抑える。その瞬間、凪紗は峰屋の体躯に向かって烈しく、幼児のように叫んだ。涙が霞むような声量で叫ぶ彼女を包み込んだまま、峰屋は頑丈に佇み続けた――大丈夫、大丈夫――何度も繰り返しながら――大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫……。

やがて凪紗は嘔吐する勢いで嗚咽し、それを合図に峰屋は彼女を解放した。胸板のあたりを見つめたまま恥ずかしげに見上げる凪紗に一瞬だけ接吻してから峰屋は彼女の両肩を持ち、力強く軽自動車の方を向かせた。

林道を抜けてすぐ、峰屋がおもむろにカーオーディオを操作し、ラジオを流し始めた。番組は今なお昭和の演歌を放送し続けていたが、凪紗は何も言わない。峰屋が世間話の調子で呟く――車の中で観るテレビって苛々するんだよな、電波のせいだろうけど、いちいちつっかえてカクつくだろ、俺はああいうのが我慢ならないんだ、思い通りにならない感じがさ、十秒ぐらい止まったまんまで良いところが飛ばされると爆発しそうになる。舌を出して嗤った彼を横目で盗み見ていた凪紗は、しばらくして強ばっていた肩の力を抜いた。

――ねえ、やっぱり神様っていると思う――なんで――最初にニュース見たときに思ったよ、思わなかったの――神なんて関係ないだろう、べつに、俺たちのやるべきことは事件が起きていようと起きていまいと、変わらなかったさ、どっちにしたって二人を始末するのが目標だったんだから――鷹揚に言い切った峰屋は、凪紗の陶酔した面持ちを確認してから続ける――まあ、もっとも、アイツみたいに社会を神だと思っている人間には、ニ

ュースは覿面に効いただろうな、おかげで頭の回らないネズミみたいになってくれた――出し抜けにスイッチを押して、全ての窓を開けた――だいぶ臭わなくなったな――本当に臭いがしてたみたいに言うの、やめてよ、アイツのこと、思い出させないで――アイツの方は、未練があったみたいだが――そういうところがキショい、さっさと堕ろせって言ってくれたら、こんな面倒くさいことにならなかったのに――未練のおかげで面倒ごともクリアできたんだけどな――だから飛び降りる演技もしろって言ったの――もちろん、俺の言うことは正しいんだよ……ああでも、鞄は勿体なかったな、使おうと思えば使えたのに――いやだよ、グロいな……――お前こそアイツに取り憑かれてるんじゃないか、鞄には死体なんて入ってなかったんだぞ――そうだけど……ねえ、何か別の話をしようよ。

国道と合流する三叉路まで戻ってきたあたりで峰屋は息を呑んだ。前方で回転灯と矢印板が煌々と照っている。その深紅の光の下、微かに見える白黒の車両と複数の制服姿。

検問か――食いしばるように峰屋が言った途端に凪紗が狼狽を露わにする。逃げよう、ねえ、逃げないと――錯落して繰り返す彼女に、峰屋は前を向いたまま咆吼じみた一喝を加え、低く重く命令する――普通にしてろよ、絶対に馬鹿を晒すな、今だけは。

路傍から突き出す赤い旗に、従順に停車する。峰屋はラジオを止め、ついで何でもない風にスイッチへ手を伸ばし押し込んだが、開ききった窓はそれ以上動かない。飛び出た舌打ちを咳き込むような笑いで打ち消す。

赤い旗を持ち、白いヘルメットを被った中年の警官が助手席の方へ寄った。彼は歯噛みする凪紗を覗き込むように顔を近づけ、一枚の紙片を手渡し流れ作業のように喋りだす――九年前のこの時間あたりに轢き逃げ事件がありましてね、もうじき時効だってこともありまして、情報を集めさせてもらってるんです、十歳の男の子が亡くなった事件なんですけれども、まあご家族の方も含めてね、もし何か知っていることがあれば、ご連絡いただければと思います……。

小刻みに頷く二人に彼は敬礼し、それで用事は済んだらしかった。アクセルを踏み込みつつ峰屋はバックミラーをちらと窺う。警官たちはもう後続の車に取りかかっている。すぐに遠ざかって、赤い光も見えなくなった。

凪紗の表情が弛緩し、遂に堪えきれなくなって吹き出した。それはたちまちヒステリックな爆笑へと成長する。手首をしなやかにスナップさせて拍子を打ち、涙ぐみながらけたたましく笑い続ける。全能感に充ち満ちた笑いを笑う彼女を尻目に、峰屋はハンドルを忙

しなく指で叩きながら視線を彷徨わせていた。彼女の甲高い哄笑を、遠ざけるように首を傾ける。

やがて峰屋はスイッチを押し、窓を閉めた。空気を察し、目を丸くする凪紗に、彼は絞り出したような明るい声で言う――そういやあの赤ちゃん、結局誰の子だったんだ。

凪紗は喉を鳴らしながら甘く微笑んだ。そして返事をする代わりに左手を掲げる。開ききった手指の、まず親指が折れる。

峰屋は正面から視線を外して、しばらく凪紗の指の動きを追いかけていた。目まぐるしく過ぎていく街灯の光を背後に、彼女の手は暗黒の穴になっている。細っこい指が一本ずつ、焦れったく折れるたびに穴は小さく強固になる。滑らかに流れるラジオが臨時ニュースを読み上げる――連続乳児失踪事件について、警察は事件に関与していると思われる三十三歳の男を含めた男女三人を未成年者略取、及び死体遺棄の容疑で逮捕したと発表しました……詳細は、続報が入り次第随時お伝えいたします……。

五本の指が全て折れた頃にはもう峰屋は興味を失い、前を向いていた。指がハンドルの上で、貧乏揺すりのような勢いで再び震えだす。凪紗は握り拳をゆっくりと腿の上に置く。それから峰屋の横顔を、溶かすほどに凝視するが彼は気付かない。彼女の全身は微かに震えているが、相貌は未だ笑顔が尾を引いており、幸福そうに引き攣っている――ねえ、これからどうすればいいんだっけ。

（原稿用紙換算六十四枚）